



学校だより

12月号

令和3年11月30日

～ まちのみんな ひとつになあれ ～



「宵の明星」

学校長 後藤 直樹

先日、朝会での講話の中で、子どもたちにこんな宿題を出しました。その内容は、「一番星」宵の明星（金星）を自分で見つける。という課題です。たまたま11月の初旬に、太陽との角度の関係で金星が1等星の100倍もの明るさで輝くということでした。実際に、見晴らしの良い本校のベランダからは、美しい夕焼けのオレンジ色が消えかけた頃、まるで飛行機のライトかと思間違えるほど輝いている星が見えました。思わずスマホを向けている職員もいました。是非、この感動を子どもたちにも体験させたいと思いましたが、この時刻まで子どもたちを残すわけにもいきません。そもそも小学校の指導内容に惑星は含まれていません。そこで家庭学習（宿題）という方法にさせていただきました。

修学旅行から戻った翌朝、いつものように見守り隊の皆さんと横断歩道に立っていると、「校長先生！」「見ました！すごく光ってた！」一人の女の子が目輝かせて嬉しそうに報告してくれました。私も感動を共有できたことと、朝会のお話をしっかり聞いていて、すぐに宿題に取り組んでくれたことでとても嬉しくなりました。ちょっとした体験や、先生や友達の言葉が、将来の進路や生き方を決めていく時に、そのきっかけとなることがあります。特に小中学生の感受性の豊かなこの時期には、その可能性も高いのではないかと思います。ですから、その可能性を広げるという意味でも、より多くの体験の機会、感動の機会を与え続けることも学校の大切な使命ではないかと考えています。今や欲しい情報や資料は、図書館まで足を運ぶこともなく、ネットで一瞬にして手にすることができます。しかし深く記憶に残ることや、心に残ることの多くは体験や経験から得られるものです。

感染症終息まで、もう一息の所まできているかとは思いますが、この後もできる限り子ども達の体験的な活動や豊かな経験を確保する努力を続けていきたいと考えております。そして、このコロナ禍の経験をただ「多くの日常生活が奪われてしまった。」という負の記憶だけにとどめることなく、「今できることを精一杯頑張る。」という教訓として、子ども達の気持ちの中にも生き続けて欲しいと願います。



校庭での全校朝会